

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 講師

氏名 金井 詠一

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

私の教育活動の責任範囲は、獣医学科臨床系科目の教育および研究活動全般に及びます。具体的には、小動物外科学、小動物腫瘍学、獣医放射線学に関連する講義および実習を担当し、学生の臨床スキルと学術的知識の向上を支援することが主な役割です。また、卒業論文指導を通じて、研究の進め方や学術的な思考を指導し、論理的思考力や問題解決能力の育成に貢献しています。加えて、臨床現場に即した教育の提供にも責任を持ち、臨床的思考に基づく講義を行い、実践的な獣医師の育成に寄与しています。

さらに、国家資格を有する獣医師としての専門的な自覚を学生に芽生えさせ、プロフェッショナルとして社会に貢献できる人材の育成に責任を持っています。そのために、最新の知識や技術の習得を促す教育を行い、学生が継続的に自己研鑽できる環境を整えています。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
獣医外科学	獣医学科	必修	4	140
獣医放射線学	獣医学科	必修	2	140
小動物獣医総合臨床Ⅱ	獣医学科	必修	5	140
小動物獣医総合臨床Ⅲ	獣医学科	必修	5	140
総合獣医学	獣医学科	必修	6	140
基礎・小動物獣医総合臨床Ⅱ	獣医学科	必修	4	140
獣医総合臨床実習	獣医学科	必修	5	140
小動物臨床実習	獣医学科	必修	5	140
小動物病院実習	獣医学科	選択	6	10
卒業論文	獣医学科	必修	6	3
獣医学特論	獣医学科	必修	6	3

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

教育理念の基づいた教育のアプローチ

私は、社会のニーズに適した知識と技術を提供できる獣医師の育成を教育の中心に据えています。そのため、学生にはプロフェッショナル（国家資格有資格者）としての自覚を持ち、自らの知識と技術を適切にアップデートできる力を養ってもらおうことを目指しています。これを実現するために、「獣医学に対する探究心の醸成」「チームワークの強化」「モノを伝える力の向上」という3つの柱を軸にした教育アプローチを行っています。

教育アプローチを行う理由と信念

私がこの教育アプローチを重視する理由は、現代の獣医学が単なる知識習得ではなく、絶え間ない進歩と実践的応用が求められる分野であるためです。獣医師は、日々進化する診療技術や獣医療情報に適応し、自ら学び続ける姿勢が求められます。そのため、私は以下の信念に基づき教育を行っています。

- 1.知識は単なる情報の詰め込みではなく、実践で活かせるものでなければならない
学生が「考える力」を養えるよう、授業では問題解決型のアプローチを重視し、単なる暗記に頼らない学習を促進する。
- 2.獣医学は個人戦ではなく、チーム戦である
実際の臨床現場では、獣医師だけでなく看護師、技術者、さらには動物の飼い主とも協力する必要がある。そのため、チームワークを大切にする姿勢を学ばせる。
- 3.獣医師は情報を正しく伝え、社会と関わる役割を担う
臨床現場では、診断や治療方針を正確に伝えることが不可欠である。そのため、プレゼンテーション能力や論理的な説明力を強化する。

教育の価値と目標

私の教育活動の根底にある価値は、「学び続ける力を持つプロフェッショナルの育成」です。獣医学は一度学んで終わりではなく、卒業後も継続的な学びが必要です。そのため、学生が自ら学び、考え、協力しながら成長できる環境を提供することが私の使命だと考えています。

短期目標:

デジタルとアナログの融合による教育効果の最大化

ICTを活用しながらも、対面指導の価値を再認識し、バランスの取れた教育を提供する。

リアルタイムアンケートの導入による双方向型授業の実践

長期目標:

外部機関との研究・教育連携を強化し、多様な分野で活躍できる獣医師を育てる

学生が卒業後も自ら学び続けるための土台を築く

以上のように、私は知識の応用力、協働力、情報伝達力を備えた獣医師の育成を目指し、日々教育活動に取り組んでいます。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

教育に関する考え方

私の教育理念は、社会のニーズに適した知識と技術を提供できる獣医師の育成にあります。獣医師は、単に知識を習得するだけでなく、実践的に活用し、継続的に学び続ける力を持つプロフェッショナルでなければならないと考えています。そのため、教育においては以下の3つの視点を重視しています。

1. 獣医学に対する飽くなき探究心を持ち、自ら学ぶ力を育てる

学生が自ら課題を発見し、解決策を考え、知識を深められるような教育を提供する。

獣医学の枠を超えた多角的な視点を持つことを促し、より広い視野で問題解決できる能力を育む。

2. チームワークやPay Forward（先輩から後輩へ知識や経験を受け継ぐ文化）を重視する

臨床現場ではチーム医療が不可欠であり、知識や技術の共有が重要となるため、協働的な学びを奨励する。

学生同士の情報共有を活性化させるため、メンター制度やゼミ形式の学習を取り入れる。

3. 「モノを伝える力」を養い、社会に貢献できる獣医師を育てる

獣医師は診療現場で診断や治療方針を適切に説明し、関係者と円滑にコミュニケーションを取る能力が求められる。

プレゼンテーションや論文発表の機会を増やし、論理的思考力と表現力を強化する。

教育の方法

この理念を実現するために、以下の方法を用いて教育を実践しています。

1.アクティブラーニングの導入

学生が受動的に学ぶのではなく、自ら考え、調査し、発表する機会を増やす。

具体的には、自主的な論文ゼミやテーマ別勉強会（2週間に1回）を実施し、学生が主体的に学ぶ環境を整える。

2.ICTを活用した教育

講義資料や録画動画をクラウド上で共有し、学生が時間や場所を選ばずに復習できる環境を提供する。

生成系AIを活用し、適切な情報収集や活用スキルを養う。

3.思考力を育む授業設計

単なる暗記ではなく、知識を組み合わせることで問題解決に活かせる力を育てるため、臨床的思考に基づいた授業を行う。

国家試験対策として、過去3年の試験問題の傾向を分析し、臨床現場に則したケーススタディを活用する。

4.少人数制の実習・メンター制度の導入

実習では少人数制を活かし、個々の学生の理解度を把握しながら指導を行う。

卒業論文指導においては、勉強会や論文ゼミを通じて、先輩・後輩間の知識共有を促すメンター制度を導入する。

5.プレゼンテーションやディスカッションの強化

論文ゼミや研究発表会でのプレゼンテーションを重視し、論理的思考力や伝達力を鍛える。外部機関との交流を促進し、異なる分野の専門家と議論する経験を提供することで、多角的な視点を身につけさせる。

6.リアルタイムフィードバックを活用した双方向授業

学生の理解度をリアルタイムで把握するため、リアルタイムアンケートやディスカッションを取り入れた双方向授業を実践する。

授業評価や試験結果を基に、毎年カリキュラムや指導方法を改善し、学生が最も効果的に学べる方法を模索する。

（１）アクティブ・ラーニングについての取組

有

学生が主体的に学び、知識を応用し、臨床現場で実践できる力を養うことを目的に、様々なアクティブ・ラーニングの手法を導入しています。論文ゼミやPBL（Problem-Based Learning：問題解決型学習）、実習でのフィードバックを通じて、単なる暗記ではなく、知識を活用できる能力を育成しています。さらに、ICTや生成系AIを活用することで、学習の自由度を高め、学生が自ら学ぶ環境を整えています。

今後も、より効果的な学習方法を模索しながら、学生の成長を支援するアクティブ・ラーニングの機会を提供していきます。

（２）ICTの教育活用

有

講義資料や録画動画をクラウド上にアップロードし、学生がいつでもアクセスできるようにする。

生成系AIを活用し、適切な情報収集方法を学ばせ、実践的に活用するスキルを養う。
オンラインディスカッションを活用し、授業外でも学びを深める機会を提供。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

私は、学生が主体的に学び、知識を実践で活かせるような教育を提供することを重視しています。そのために、双方向型授業、ICTの活用、PBL、実習でのフィードバック、研究活動の強化、国家試験対策といった様々な工夫を取り入れています。今後も、学生の成長を促進するための新たな教育手法を模索し、より良い学習環境を構築していきます。

（２）学生の理解度の把握

B

双方向型授業の導入（インタラクティブ・ラーニング）

目的:

受動的な学習ではなく、学生が主体的に学び、理解を深める。

知識の定着を促進し、臨床現場で活用できる能力を養う。

具体的な取組:

リアルタイムアンケートシステム（匿名回答可）を活用し、授業中に理解度を確認しながら進行。

授業の要点を問いかけ、学生同士で考え、ディスカッションする時間を設ける。

国家試験の過去問や臨床ケースを例に、学生が診断や治療を考え、意見を発表する機会を増やす。

効果:

学生が積極的に参加することで、理解が深まり、授業への関与が高まる。

リアルタイムで理解度を確認できるため、その場で補足説明を行い、理解のズレを修正できる。

（３）学生の自学自習を促す工夫

B

PBL（Problem-Based Learning：問題解決型学習）の導入

目的:

学生が実際の臨床現場で直面する問題を想定し、思考力・判断力を養う。

自ら問題を解決する力を育み、卒業後の臨床現場で即戦力となる能力を養成する。

具体的な取組:

実際の診療ケースを基に「この患者にはどのような検査を行うべきか？」などの問いかけを行い、学生に診断・治療方針を考えさせる。

チームごとにディスカッションを行い、結論を発表し、教員がフィードバックを行う。

学んだ内容を実習と連携させ、実際の動物の診察に活かせるよう指導。

効果:

学生が知識を応用し、実際の診療の流れを理解できる。

チームワークや情報共有のスキルが向上し、臨床現場での協働に役立つ。

(4) 学生とのコミュニケーション

B

獣医学実習の創意工夫（フィードバック型実習）

目的:

実習の質を高め、学生の理解度を深める。

獣医師としての診察・治療のプロセスを実践的に学ぶ。

具体的な取組:

実習前に「学習目標」を明確化し、どのスキルを習得すべきか事前に意識させる。

実習後に個別フィードバックを実施し、良かった点や改善点を具体的に伝える。

講義後小テストを活用し、学生自身が「今日の学び」を振り返り、次回に活かせるよう指導。

効果:

自分の強み・弱みを認識し、次のステップへ進むための指針が得られる。

フィードバックにより、実習の経験が単なる作業ではなく、学びとして深まる。

(5) 双方向授業への工夫

B

双方向型授業の導入（インタラクティブ・ラーニング）

目的:

受動的な学習ではなく、学生が主体的に学び、理解を深める。

知識の定着を促進し、臨床現場で活用できる能力を養う。

具体的な取組:

リアルタイムアンケートシステム（匿名回答可）を活用し、授業中に理解度を確認しながら進行。

授業の要点を問いかけ、学生同士で考え、ディスカッションする時間を設ける。

国家試験の過去問や臨床ケースを例に、学生が診断や治療を考え、意見を発表する機会を増やす。

効果:

学生が積極的に参加することで、理解が深まり、授業への関与が高まる。

リアルタイムで理解度を確認できるため、その場で補足説明を行い、理解のズレを修正できる。

（６）国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

B

目的:

単なる暗記ではなく、臨床的思考に基づく学習を促す。

国家試験の問題を分析し、実践的な学習法を提供する。

具体的な取組:

過去数年の国家試験の出題傾向を分析し、重要ポイントを重点的に指導。

グループディスカッションを通じて、出題意図を考えながら解答を導く形式を採用。

模擬試験を実施し、本番環境に慣れる機会を提供。

効果:

試験の出題傾向を理解し、効率的に学習できる。

実際の試験と同様の環境で学ぶことで、試験本番での対応力が向上する。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

講義中に重要な専門用語を図や具体例を用いて解説して学生の理解を促進した。難解な内容については動画や補足資料を追加して復習の機会を提供した。授業中に「リアルタイムアンケート」を導入し、その場で理解度を確認した。学生の回答結果に応じて補足説明を行った。

（２）（１）の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

- 1.リアルタイムアンケートの回答率のばらつき
積極的に参加する学生がいる一方で、消極的な学生も見られた。
- 2.補足資料や動画の利用率のばらつき
補足資料や動画を全員が活用しているわけではない。

（３）（２）を踏まえた次年度の取組

- 1.リアルタイムアンケートの回答率のばらつき
今後の対策：
匿名で回答できる仕組みをさらに強調し、心理的ハードルを下げる。
小グループ単位で回答をまとめ、ディスカッションを通じて回答を発展させる機会を増やす。
- 2.補足資料や動画の利用率のばらつき
今後の対策：
授業中に動画の一部を紹介し、活用の重要性を伝える。
補足資料の内容をクイズ形式にして、授業中に復習する機会を増やす。
学生が動画や資料を活用したかどうかを確認するフィードバックの仕組みを設ける

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

これまでの取組により、学生の成績向上、学習の自主性向上、国家試験対策の強化などの成果が見られた。一方で、さらなる学習進捗管理の仕組みを強化する必要がある。

今後は、学習管理システムの導入、反転授業の実施、臨床ケーススタディの拡充を通じて、学生の成績向上と実践力の強化を目指し、より効果的な教育環境を構築していく。

（２）（１）の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

今回の取組により、学生からは「臨床現場での適応力が向上した」といったポジティブな声を受けた。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

診療業務とかぶらないときは極力参加している。オンラインの録画配信はとても助かる。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

短期的な目標

現在の教育現場においてデジタルコンテンツはかけがえのないものとなったが、アナログの良いところも再認識し、それもかけがいのないものだった。両者を融合し、教育効果の高いコンテンツを生み出していきたい。

長期的な目標

外部機関との研究を通じ、様々な分野で活躍できる獣医師を育てていく。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

- ・ シラバス
- ・ FD研修
- ・ 授業評価、メールのやりとり